

劇場用映画 大人向けのファンタジー

いけちゃんどぼく (準備稿)

脚本 大岡俊彦

原作 西原理恵子「いけちゃんどぼく」(角川書店)

登場人物表

ヨシオ(9) 感受性の高い子供。

いけちゃん(?) ぶよぶよしたキャラもの。おばけ的な。

美津子(35) ヨシオの母。パートで働いている。

茂幸(35) ヨシオの父。気弱な大酒飲み。

清じい(65) 牛乳屋。元空手家。

みさこ(16) みきの姉。ヨシオのあこがれのおねえさん。

ヤス(9) 漁師の息子。いじめっ子。石投げの名人。

たけし(10) 漁師の息子。いじめっ子。舟の櫂で殴る。

トモ(9) ヨシオのふつうの友達。逃げ足が早い。

マツ(9) ヨシオのふつうの友達。逃げ足が早い。

きょうちゃん(8) つぶれそうなうどん屋の息子。気が弱い。

みぎ(8) ヨシオのことが好きな女の子。

あずき洗い(?) 妖怪。

先生 学校の先生。

哲(18) みさこと駆け落ちするちんぴらヤンキー。

かおり(27) 茂幸の浮気相手。

ばあさん(80) ヨシオのばあさん。魚屋。

友人(40) 美津子のパート先の同僚。

親戚のおばさん1〜3

隣の隣の隣の町の悪ガキ1〜9

ミサエ(18) 大学生。みさこに似たヨシオの最初の恋人。

ヨシオ(80) 老人のヨシオ。

いけこ(60) ヨシオの最後の恋の相手。

漁師たち

駐在さん

ヨシオ（18）

大学生のヨシオ。

※ 本編中では、ヨシオ、いけちゃん、茂幸は標準語、他の人物は全て関西弁で話している（土佐弁にすべきかも知れない）。

○青い海、海中

青。海の中。海面からふりそそぐ光と、白い泡。  
ヨシオ(9)、口から大量の泡を吹きながら、ゆ  
っくりと青い海の中へ沈んでゆく。

ヨシオ(9) NA 『ぼくがはじめておぼれた日』

海の底は見え、暗い青が横たわっている。魚の  
群れが沈みゆくヨシオのそばを通り過ぎる。

ヨシオ NA 『ほんそめわけべらもるりすずめも、はじめて大嫌い  
だと思った』

ヨシオがその魚をつかもうとしても、するりと手  
のひらから抜けてゆく。

ヨシオ「~~~~!!(ぶくぶくぶく)」

○回想、海のそばのひなびた魚屋

店番のばあさんがあぶった干物をヨシオに。

ヨシオ「またおばあちゃんの自慢？」

ばあさん「何度でも言うで。わしの自慢はな、女手ひとつで魚屋  
しながら5人の男の子を育てて、そのうち一人をなんと大  
学までいかせたことじゃ」

ヨシオ、無心で干物をかじっている。ばあさん、  
ヨシオの頭をなでて、

ばあさん「ヨシオは、どうや？」

ヨシオ「ぼく? ぼくは…」

○青い海、海底

ヨシオ NA 『ぼくは、おばあちゃんの次の自慢にならないといけ  
ない。こんな所で死ぬ訳にはいかないのだ』

海底の砂に、がんばって着地。海底を歩き出す。  
ヨシオの主観の中の海の世界。子供の背の十倍く  
らいの深さで、マンガチック。シャコ貝が口をひ  
らき、ピノキオは大蛸に絡まれ、亀に乗った浦島

太郎が通り過ぎる。ふと立ち止まり上を見ると、海面から光がふりそそいでいる。

ヨシオ N A『海の上からは、おもゆのようにあかりが下りてきて、あの上にはきつと神様がいるのだろうと思う』

よく見るとおばちゃん達が平泳ぎしている太い足。赤やピンクのスカートがゆらめく。

ヨシオ N A『けど見えたのは、ワンピースいっちょで泳ぎまくるおばちゃん達のズロースで。遠くから見ると、ふとった金魚みたいできれいだった』

くいくい、とヨシオのシャツを引張るいけちゃん。  
(いけちゃんは、子供の半分くらいなの、おばけのようなぷにぷにした生きもの。黄色、オレンジ、きみどり、水色など、毎回色が違う)

ヨシオ「？」

いけちゃん「笑顔のままぶくぶくと口から泡を出す」

それを見て息が苦しいのを思い出すヨシオ。口から泡をはいて、いそいで上にあがってゆく。

ヨシオ N A『くらげのような泡はぼくより速く、海の色はつむぎの色からあたたかいるりの色へ』

○同、浜辺

茂幸(35)が浜辺の砂で戦艦長門をつくっている。白い帽子の美津子(35)が見ている。

美津子「帽子でポーズをとりながら」せっっかく買ったんよ。

せっっかく買ったんよお父さん。ヨシオなんかより私を…」

茂幸「ヨシオはどこにいったんだ？ いい長門が出来たぞお」

美津子「…」

美津子、砂の軍艦を足で壊す。

茂幸「なにすんだっ！」

一方、ブハッと息をはきながら海面に出てくるヨシオ。呆然。海は腰ぐらいの深さだった。きよろきよろと周りを見渡す。

ヨシオ「なんてこった」

穏やかなビーチでアイスを食べる人々。泳ぐ人々。

ヨシオ「なんてこった。ぼくが生死の境をさまよったというのに、世界は何ひとつ変わってない」

美津子を責める茂幸、怒って帰る美津子。ザバツと波から出てくるいけちゃん。

いけちゃん「どうしたのヨシオ？」

ヨシオ「いけちゃん。ぼくは神を見失った。地球はぼくをおいて勝手に回る。世界はぼくと関係ないんだ」

いけちゃん「そりゃそうでしょ。ヨシオぶっちゃけ子供だし」

ヨシオ「なんだよぶっちゃけんよ」

波打ち際を歩く二人。立ち止まるヨシオ。

ヨシオ「いけちゃん。ぼくは、世界を変えられる？」

いけちゃん「未来になったら、わかるよ。きみはみんなに愛されて、みんなのじまんになる」

ヨシオNA『いけちゃんはずっと前からそばにいる。いけちゃんは何となくそばにいる。それからときどき謎だ。それで、ぼくといけちゃんはなよした。ずっと』

○野原を走る、ヨシオといけちゃん

○タイトル 「いけちゃんとぼく」

○クレジットシーケンス（朝の風景）

ここは、まるい緑の山が多くて青い海がある、湾の多い漁師町。おだやかな気候と、前世紀からそのままのようなさびれた町が溶けこんでいる。東京とはあまり関係のない、よい日本のいなかの風景だ。

○朝、ヨシオの家、門柱

門柱の影から外をうかがうヨシオ。

ヨシオ「右よーし左よーし」

いけちゃん「(左右確認)」

ヨシオ「右よーし左よーし」

いけちゃん「(左右確認)」

ヨシオ「右よーし」

いけちゃん「はやくいきなよ」

ヨシオ「慎重にも慎重を重ねなきゃ！ 三日連続セーフだったん

だよ！？ どっちからいくかびびるだろ！？」

いけちゃん「ぶっっちゃけ、学校でも会うんでしょ？」

ヨシオ「だからすぐぶっっちゃけんよ！ 朝から遭遇するのは、

一日のテンションが違うんだよ！ 今日の乙女座はラッキ

ーデーだったっけ…」

みさこ「ヨシオくんおはよう」

隣の家から、美人女子高生のみさこ(16)が登校。

ヨシオ「み、みさこさん」

みさこ「なにしてんの？」

ヨシオ「みさこさん、右と左、どっちが好き？」

みさこ「？ 左」

ヨシオ「わかった」

左へ走り出すヨシオ。

みさこ「手、出し。アメちゃんあげる」

ヨシオ「紅茶アメだ。この金色が渋い」

みさこ「みつからんように食べ」

ほほえんで去ってゆくみさこ。風になびく黒髪。

その匂いをかいでうっとりするヨシオ。

ヨシオ「なんでびじんはいい匂いがするんだろう。今日は超ラッ

キーだ」

いけちゃん「(ちょっとむっとしながら)アレは美人の匂いじゃ

なくてシャンプーの…」

最後まで聞かず、ヨシオは左へ走っていく。つい

ていくいけちゃん。

○清じいの牛乳屋、朝

三叉路の真ん中にある牛乳屋。友達のトモ（9）、マツ（9）が待っている。走ってくるヨシオ。いけちゃんはついてきているが、他の人には見えていない。

ヨシオ「トモ」

トモ「マツ」

マツ「ヨシオ」

トモ、マツ、空の牛乳ビンを盗んできて投げあげる。地面におちて割れる牛乳ビン。自転車にのって配達から帰ってきた清じい（65）。

トモ「清じいだ！！ 熊殺しにころされる！！」

清じい「コーラーガキどもー！！」

三人といけちゃん、ダッシュで逃げる。

○きょうちゃんのうどん屋の前、朝

ヨシオ「まずいうどん屋ー」

トモ「まずいうどん屋ー」

マツ「まずいうどん屋ー」

きょうちゃん「お：おはよう」

店の扉を半分くらいあけて、弱虫のきょうちゃん（9）がおずおずと顔を出す。ヨシオを認め、笑う。三人、無視して隣の野原を抜けようとする。

○海に見える野原、朝

と、ヨシオの頭に石がぶつけられる。

ヤス「三日ぶりやったっけ。やっと朝から会えたのう」

たけし「今日こそヨシオの涙、見せてもらおか」

ヤス（9）は石を数個持って手で遊んでいる。巨

漢のたけし（10）は子供用の舟の櫂をもつ。

ヨシオ「：やっぱ、朝の占いをチェックすべきだった」

トモ「ヤスとたけしになんかかなうもんか！」

マツ「逃げるぞー！」



引き返してダッシュで逃げるトモ、マツ。

ヨシオ「なんでいっつも逃げんだよ！」

ヤス「もう味方もおらんのか。たった一人でどうすんねん」

また石を投げる。よけるヨシオ、横道へ行こうとする。しかしヤスの次々に投げた石は、ヨシオの頭、肩、足に正確に当たる。転ぶヨシオ。体を支えた腕にも石がぶつけられる。いけちゃん、おろおろしながらも止めようと体を張るが、石は全部いけちゃんをすり抜けてヨシオに当たる（いけちゃんは実体ではない）。いけちゃんは飛び上がったヤスの顔の前でおどかすのだが、見えていないヤスはすり抜けていく。ヤス、たけしはうづくまるヨシオの所へ。いけちゃん、後ろから蹴りを入れるがすり抜ける。くやしがる。

ヤス「どうしても泣かんつもりか」

ヨシオ「…力で心を変えられると思うな」

ヨシオを懼でぶん殴るたけし。馬乗りになる。

たけし「クラスの男はみんな泣いたのに、なんでお前だけ泣かん。

そろそろ、手加減でけんようになんぞ」

いけちゃん、うしろから飛びかかるがすり抜ける。

ヨシオ「…(たけしに反抗的な目)」

たけし、何度も殴る。

ヤス「泣けや。声出して泣けや！」

ヨシオ「…」

たけし「おもんないのう」

ヤス「おもんないのう！」

飽きた二人は去ろうとする。ヤス、石を拾って、店の扉に隠れて見ているきょうちゃんの足下に投げる。

きょうちゃん「ひゃあ！！(転ぶ)」

ヤス「ハッハッハッヨシオ、お前もきょうちゃんぐらいのリア

クションしてみろや」

上半身を起こすヨシオ。

ヨシオ「…(独り言)今日は運が悪かっただけさ」

きょうちゃん、よってくる。

きょうちゃん「ヨシオくん」

ヨシオ、無視して起き上がり、ズボンについた泥を払う。

○小学校の門の前、朝

ヨシオの前に立ちはだかるように立つ校舎。

ヨシオ「いけちゃん、今日は学校をさぼるよ」

いけちゃん、マンホールの穴からにゅっと出現。

ヨシオ「今日は山のぼりをしよう」

ヨシオは道を引き返して走り出す。いけちゃんついてゆく。

○ヨシオの家、縁側

美津子（35）、洗濯物を豪快に手一杯持って縁側から庭へ。縁側の下に隠れていたヨシオといけちゃん、その死角から侵入、台所へ。

○同、台所

ヨシオといけちゃん、手慣れた犯罪コンビのように、棚から板チョコを出しリュックに入れる。ティーパックとポットで、魔法瓶型の水筒にお茶を入れる。

美津子「ヨシオ。学校は!？」

ヨシオ「忘れものとりに来た!！」

美津子「ヨシオ!？」

ダッシュで逃げるヨシオ、いけちゃん。

○小さな山の前

ヨシオといけちゃん、わくわく。

ヨシオ「やーまのーぼりのうたー♪ ずんずんずんずん」

○山の中、中腹

ヨシオ「ずんどこずんどこ」

いけちゃん「ずんずんずんずん」

ヨシオ「どんどこどんどこ」

いけちゃん「どんどんどんどん」

ヨシオ、頭を抱えてしゃがむ。

いけちゃん「どうしたの？」

ヨシオ「頭の中の小人が、階段をのぼっている」

× × ×

ヨシオの想像、ヨシオの脳内の階段。

ロボット状の小人が階段を上るたび、振動が。

× × ×

いけちゃん「それは頭痛というんだよ。休もう」

○同、くらい林の中

双子岩の上で二人は休む。

ヨシオ「山の中で休んでいるとこわくなるね」

いけちゃん「くじらのおなかにいたピノキオはこんな気持ちだったろうね」

たろうね

ヨシオ、チョコをこっそり食べようとすると、い

けちゃんがいつの間にか反対側から現れ、

いけちゃん「おべんとうにはまだ早いっ」

とヨシオの頭ごとかじる。□の中で暴れるヨシオ。

○同、頂上付近の林

ヨシオ「つめたい空気があつくなってきた。でも山のおいはしんとしてくる」

ふともれた言葉に感心するいけちゃん。眼下に広がる小さな町。小さな小学校。

ヨシオ「今ごろみんなあそこのイスにしばらく動けななんだ」  
校庭ではヤスとたけしが猛威を振るっている。ト  
モ、マツ、きょうちゃんが逃げ、生徒達がモーゼ  
の十戒のように割れてゆく。

ヨシオ「休みさえくれば顔を合わせなくてすむ。夏休みになった  
らずっと会わなくてすむんだよ？」

後ろの林に風がわたり、ザザザと音がる。後ろ  
をふりむくヨシオ、妖怪あずき洗いと目が合う。

あずき洗い「あ」

ヨシオ「妖怪あずき洗いだ」

あずき洗い、あずきを洗う(さっきと同じ音がす  
る)。ヨシオ、小石を拾って投げる。石は当らず、  
びっくりしたあずき洗いは逃げてゆく。

いけちゃん「ばちが当るからやめなさいっ」

またも頭をまるごとかじり。暴れるヨシオ。

○同、山頂

二人でばんざい。ヨシオ、地面のアリの巣を発見。

ヨシオ「ぐふふ(黒い笑い)」

いけちゃん「？」

ヨシオ「ぐふふ。ぐふふ。今日は復讐のれんしゅうをしよう」

水筒から熱いお茶をアリの巣へ。あわてるアリ達。

ヨシオ「わははは。ざまーみやがれ。おろかなくみんどもめ」

虫取り網を出すヨシオ。

ヨシオ「次はトンボの頭を大量ゲットして…」

いけちゃん「ゲットして？」

ヨシオ「万華鏡！」

大量のトンボの頭を万華鏡に入れ、のぞきこんで  
ぐるぐる回す。

ヨシオ「ちょーーーーきしよくわるい！ー！ー！ー」

いけちゃんにのぞかせ、ぐるぐる回す。

いけちゃん「ちょーーーーきしよくわるい！ー！ー！ー」

ぐるぐる目玉と紫色の肌、鳥肌になるいけちゃん。

その横を飛ぶちようちよ。

ヨシオ「虫を殺すんだーっ！」

次々にちようちよを捕獲。

ヨシオ「はりつけの刑！」

何匹ものちようちよの羽にのりを塗り、ノートに貼りつける。

ヨシオ「アーン、ベリベリの刑！」

次々とはがす（ちようちよ、羽ばたいて逃げる）。と、ノートに羽の燐粉が模様として残る。意外な美しさに魂を奪われる二人。

ヨシオ「これは宝物にして押し入れにしまっておこう」

いけちゃん「うんさんせい」

ヨシオ「次ははんみょうをつかまえ…」

はんみょうをつかまえようとするヨシオ。だが、ぴよんと跳んで逃げられる。

ヨシオ「つかまえ…」

飛んで捕まえようとするヨシオ。また逃げられる。

ヨシオ「つかまえて…つか…」

その度に逃げられ、どんどんどんどん遠くへ。うわー、と火がついたように泣き出す。

ヨシオ「ちくしょー！ はんみょうのバーカ！ みんなのバーカ！ すっごいバカのクセに！ クチじゃ勝てないからっていつもいぼくの頭をポコポコポコ！ ぼくの頭は木魚じゃないんだー！ 泣かないぞ！ 泣くもんか！ うわああああ…ひっく、ひっく…」

いけちゃん「気がすんだ？」

ヨシオ「ううん（首をふる）」

いけちゃん、そっとヨシオの手をまるごと甘噛み。

ヨシオ「いけちゃん、なんとかしてよ」

いけちゃん「知ってるでしょ？ いけちゃんは、他の人には見えないの。直接ヨシオの人生には介入できないんだ」

ヨシオ「…」

いけちゃん「大人になって好きな人ができたら、このことを話す

といいよ」

ヨシオ「？」

いけちゃん「すきな人が笑ってくれるよ」

ヨシオ「…」

○次の朝、ヨシオの家、食卓

テーブルに叩きつけられる焼酎のコップ。

茂 幸「なんで今まで黙ってたんだ！ その傷はなんだ！」

向かいにヨシオが座らされている。ほおに絆創膏

とあざ。隣のいけちゃん、ハラハラと見守る。茂

幸、焼酎をコップに注ぎ一気飲み。

ヨシオ「…ちがうよ。これは転んだんだ」

茂 幸「美津子！ 美津子！ お前はこの事を知ってたのか！」

台所から美津子が嫌そうに顔を出す。

美津子「時々、学校さぼってたのは知ってたけど」

いけちゃん「！」

ヨシオ「(小声で) バレてたんだ」

茂 幸「知ってたって！」

美津子「学校ぐらいさぼってたってええやない。私かて毎日行って

た訳やないし、高校の時はずっと保健室でさぼってたわ。

学校だけが全てやないでしょう」

茂 幸「殴られて学校行かないって、明らかにダメじゃないか！

(一杯飲んで) ヨシオ、男と男の話をしようじゃないか。

傷が体の前にあるのは勇気の証拠だ。背中を見せて逃げて

ないってことだからな」

ヨシオ「…」

茂 幸「誰にやられた？」

ヨシオ「…ヤスとたけし」

茂 幸「あの網元たちの子供か！ 大人だけじゃなく、息子まで

よそ様に迷惑かけるのか！ デカイ顔しやがって！」

一杯気つけに飲んで、立つ。

茂 幸「いってくる！」

美津子「どこへ！？」

茂 幸「息子の危機を守る父として!!」

家を飛び出す茂幸。

美津子「ちょっと、おとうさん!!」

追いかける美津子。とり残されるヨシオ、いけちゃん。あわててダッシュ。

○漁師たちの舟だまり

茂 幸「うおおおおおおお!!」

サンダルばきで走ってきた茂幸、追いかけてきた美津子、ヨシオ、いけちゃん。漁師達が漁のあとかたづけをしている。ヤスとたけし、その中にもじって力仕事をしている。網元らしき人達は酒盛り中。人相の悪い漁師にじろりと見られた茂幸は、止まらずにUターンして走って帰る。

茂 幸「おおおおおおお!!」

ヨシオ「ええええええ!!」

ヤスとたけし、大爆笑。とり残される美津子、ヨシオ。

○夜、ヨシオの家、食卓

時計は9時をまわった。食卓の上には冷めた出前のピザ。ヨシオ、箱の中のピザをのぞいて、指でつつく。

ヨシオ「もうチーズがゴムみたいになってる」

美津子「もうちょっと待てないの!? お父さんを待ちなさ

しー!!」

ヨシオ「でも」

美津子「どうせあのピンクの鳥の女のところに決まってるわ!」

ヨシオ「ピンクの鳥?」

美津子「子供は知らんでええこと!!」

ピザの箱をつかんでゴミ箱に投げ捨てる美津子。ゴミ箱には、朝茂幸の飲んでいた一升瓶も。

美津子「…あの酒飲みが。もう寝る」

寝室へ行く美津子、ひとり取り残されるヨシオ。

ゴミ箱の中から、冷めたピザを拾って食べる。

ヨシオ「いけちゃん、ぼくが悪いの？」

いけちゃん「さあね」

ヨシオ「ヤスとたけしさえいなければ、お父さんやお母さんはケンカしないの？」

いけちゃん「それは関係ないかも」

ヨシオ「ヤスとたけし見てないよね。ぼくら、見られてないよね」  
いけちゃん「残念ながら、ガン見」

ヨシオ「話が倍ややこしくなったよ。どうやって夏休みまで逃げ切るんだよ」

冷たくて硬いピザを食べるヨシオ。

○朝、ヨシオの家の前、門柱

右と左で悩むヨシオ。隣の家をのぞきこむ。

ヨシオ「…きょうは幸運の女神、いない」

○小学校、校舎裏

ヤス、石を投げる。壁際に立たされているヨシオのすぐ脇に石が当る。

たけし「親まで出てきたらシャレにならんやろ。オレらはシャレですまそう思ってたのに」

舟の櫂で腹をどつく。うづくまるヨシオ。遠くから先生が走ってくる。きょうちゃんが連れてきた。

ヤス「誰や先生呼んできたん！」

ヨシオ「あれ？ 助かった…？ やっぱ今日はラッキー…」

ヤス、たけしはいい子のフリ。

先生「ヨシオくん、今すぐ家に帰りなさい」

ヨシオ「…？」

先生「お父さんが、事故で…事故で…家まで送るから。もうすぐ、運ばれてきはるから」



ヨシオ「…はい？」

○ヨシオの家、表

葬儀屋がドヤドヤと。トラックから走馬灯や白黒の帯を出したりしている。呆然とその中に立っているやつれた美津子。先生に送られてくるヨシオ。

美津子「お父さん、死んだ」

ヨシオ「…ええ」

○翌日、小雨の降る野原

よそいきの服(黒と白)で、しゃがんでうつむぎ、ただ耐えているヨシオ。

ヨシオ「いけちゃん。ぼく、分らないよ」

いけちゃん「そうだよね。フツーわかんないよね」

ヨシオ「きのうから起こったことが全部分らない」

いけちゃん「わかんないよね」

ヨシオ、何か言おうとしていけちゃんを見たらびつくり。いけちゃんは手のひら大にまるっこく小さくなっていて。あわててヨシオは目線を落とす。

ヨシオ「どしたのいけちゃん」

小さいちゃん「いけちゃんは困ると小さくなるの」

ヨシオ、手のひらにのせる。

小さいちゃん「だいすきなものは何？」

ヨシオ「まんがのほん」

小さいちゃん「だいきらいなものは？」

ヨシオ「うみでおぼれること」

小さいちゃん「じゃあ今のきもちも、100回くらい海でおぼれたかんじ？」

ヨシオ「うん100うみ」

小さいちゃん「あのだ」

小さいちゃん、くるくる回るとマンガみたいな地球になる(巨大な亀が支えてて、火山が爆発して

星がまわりに飛んで、海や大陸は適当なかんじ)。その火山から小さいけちゃんにゆーっと出てきて、小さいけちゃん「せかい中で人よりはやく大人にならないといけないう子供っているんだよ。キミもその中のひとりなんだよ」その地球に、色んな人種の子供が歩いている。

ヨシオ「世界中にはたくさんさんの1000うみがあるの？」

小さいけちゃん「うん」

ヨシオ「…」

地球は小さいけちゃんに戻り、ぼとりと地面に落ちる。

小さいけちゃん「ここで待ってるから、お父さんに最後のお別れをしてくんなさー」

#### ○ヨシオの家、中、茂幸の葬式

親戚たちが黒い服で集まっていて、金色の祭壇に金色の服の坊さん。走り回る親戚の小さな子供たち。その中を、ゆっくりとヨシオは祭壇と棺桶に近づいてゆく。

#### ○回想、茂幸の部屋

戦艦長門のプラモデルを楽しそうにつくる茂幸。目を輝かせて手伝うヨシオ。

茂幸「戦艦長門はいいぞ。長門が最高」

ヨシオ「ぼく、大和がいい。最強は大和でしょう」

茂幸「何言ってるんだ。大和は秘密兵器で当時は誰も知らなかった。誰もが知ってる一番艦の長門こそ、みんなの自慢だったんだ。男たる者、陽の当る所でみんなに認められる。それにな、長門の艦橋は大和より7m高い。それだけ丸い地球を遠くまで見れたんだぜ」

#### ○（元に戻り）茂幸の葬式

ヨシオ「言ってた事と、やってる事が逆じゃないか、お父さん」  
茂幸の棺桶の前に来るヨシオ。静かに眠る父の顔をさわるヨシオ。

ヨシオ「つめたっ。…へんな化粧してある。へんな化粧」  
美津子「お父さんに触らないで」

座る美津子。目を赤くして、小さくなったよう。

親戚の叔母1「(小声で) 道路の溝にはまって死ぬなんて。酔っ

払いの見本のようなへボ死にやで」

親戚の叔母2「(小声で) そこって愛人宅の前でって」

親戚の叔母3「たいした稼ぎもないのに、ええ甲斐性なこと。その女、さすがに今日はきてへんやろね」

親戚の叔母1「これからどうすんのやろ。親子二人で放り出されて。ヨシオくんがもう少し大きかったら」

ヨシオ、立って後ろを向き、頭を下げる。

ヨシオ「長男のヨシオです。きょうは父の葬式のために、おあしもと悪いなか集まっていたいて、父もよろこぶとおもいます」

親戚、水をうったように静かになる。

## ○野原

天気はもう晴れている。ぬかるんだ道を、よそいきの服のまままだ歩くヨシオ。石が頭に当たる。ヤスとたけしだ。

ヤス「お前の父ちゃんうわきものー！！！」

たけし「へタレの父ちゃん、あいじんもちー！！！」

石をまた頭に当てられる。

ヨシオ「…うわああああああ！」

二人に体当たりをするヨシオ。びっくりする二人。殴るヤス、たけし。転がっても転がっても、向かってゆくヨシオ。三人ともぬかるみの泥まみれに。ヨシオ「バカにするな！ バカにするな！ …バカにするな！」  
殴られて鼻水を出しながらも体当たりして向かっていくヨシオ。だが力の差があり過ぎる。殴ろう

としてもそもそも拳が届かない。何度も空を切る拳。馬乗りになるヤス。殴る。のびるヨシオ。

ヤス「ヨシオのくせに生意気や！」

たけし「戦宣告とみなしていいんやな。会うたんびに泣かすぞ。

一生泣かすぞ」

去る二人。大の字のヨシオ。息が荒い。小いけちやん、歩いてくる。

小いけちやん「ヨシオ」

小いけちやんは、ヨシオの右手小指を甘噛みする。

手はずすヨシオ。

ヨシオ「空を見たまま）いけちやん、早くぼくは大人になりた

い。げんじつを見るんだ。ぼくがなんとかしなきゃいけな

いんだよね。早くあいつらより大人になって、あいつらを

ぎゃふんと言わせてやるんだ」

小いけちやん「ヨシオ」

ヨシオは空を見ている。

○モニタージュ、早朝

食卓で、ごはんをもりもり食べるヨシオ。心ここにあらずな美津子。自分でごはんのおかわりをよそうヨシオ。三杯の茶碗に三杯ごはんをよそい、むせながらも無理矢理食べる。

× × ×

学校へ走っていくヨシオ。いけちやんついていく。

× × ×

野原を一周してからいく。

× × ×

漁師達の舟だまり。大人たちの手伝いをしているヤス、たけし。物陰から観察するヨシオ。ヤスとたけしは大人に殴られながら働いている。たけしは舟の櫂で殴られている。一人がもつ重いもの（木箱など）をもって動作を真似てみるが、重すぎて無理。

○清じいの牛乳屋

○同、裏

投げ上げられる空の牛乳ビン。地面に落ちて粉々に。トモ、マツ、ヨシオ喜ぶ。きょうちゃん、うらやましそうにこっちを見ている。

トモ「バカ！ ちゃんと見張れよ！ 左左左、うしろうしろ、ぐるっと回って監視！」

きょうちゃん、その通りに動き向こうを見張る。

マツ「きょうちゃんラジコンや」

ヨシオ、牛乳ビンの破片の中から、底だけの部分を拾って太陽にかざす。いけちゃん、水道からにゅっと現れる。

いけちゃん「なにしてんの？」

ヨシオ「こうするときはきらきらして、海の中で見た神さまを思い出すんだ」

きょうちゃん、いつの間にか輪に入って牛乳ビンを投げてる。頭をはたくマツ。

マツ「バカ！ 見張りは！」

清じい、いつの間にか仁王立ち。

清じい「ガキどもーーーーー！！」

トモ、マツ「つかまったら死ぬーーーーー！！」

速攻で逃げるトモ、マツ。恐怖に転ぶきょうちゃん。迫る清じい。とっさに空の牛乳ビンを投げつけるヨシオ。空中でチョップでまっぶたつにする清じい。

清じい「きえーーーーー！！」

清じい、ヨシオをとびこえて飛び蹴り。ヨシオの背後のものを破壊。ふりむきざまにヨシオに脳天チョップ。

小人「プギャーーーーー！！」

ヨシオの脳内の小人、まっぶたつに割れる。また

くつつく。

ヨシオ「清じいの空手伝説、ホントだったのかよ…」

清じい「地球にやさしい牛乳ビン！」

ヨシオ「…はい」

清じい「それを割るとはきさま地球にやさしくない男やな！」

ヨシオ「…すみません」

清じい「片付けんかい！」

きょうちゃん、腰がぬけたまま。

ヨシオ「…清じい」

清じい「なんじゃい。いいわけかい」

ヨシオ「(首をふる) 空手、おしえてください」

清じい「…なんじゃやぶから棒に」

ヨシオ「清じいを空手の達人とみこんで、お願いします。ぼくを

殴るやつを、ぎゃふんと言わせたいんです」

清じい「…拳を、にぎってみい」

ヨシオ「…(握ってみる)」

清じい「やわい。やわい自分が先に壊れるぞ。一日千回握れ」

ヨシオ「さっきの、牛乳ビンまっぶたつにした必殺技、教えてよ！

こんな地味なんじゃ一生かかるよ！」

清じい「すぐ結論にいくやつは途中もへばい。片付けてからいえ」

拳を握るヨシオ。チョップの真似をするヨシオ。

○(日変って) 野原

トタンの切れ端、段ボールなどを運ぶヨシオ。

ヨシオ「まず、心の自立をぼくはする必要がある」

いけちゃん「なるほど」

× × ×

ヨシオ「ひみつきち、完成！」

ビニールシートも備えた、本格的ホームレス的家。

小さなちゃぶ台、まんが、ラジオも完備。

ヨシオ「あとはインターネットだな。そうだ！」

と外に出て、

○ヨシオの家、茂幸の部屋

遺品整理の終わってない部屋から、戦艦長門を持ち出し、

○野原、ひみつ基地内

上座に長門を置く。うなづくヨシオ。

× × ×

トモ、マツ「すげー！ー」

と入ってくる。

ヨシオ「おりいって相談がある」

トモ「なんだよあらたまって」

ヨシオ「3対2だ。数でなら勝てるんじゃないかな。共同戦線を

張ろう」

マツ「誰に？…まさか」

ヨシオ「ヤスとたけし」

トモ「ム、ムリだよ！」

ヨシオ「ムリじゃないさ。こっちのほうが多いんだ。足りないならもっと数を集めよう。いつまでもあいつらの言うことを

聞くのか。クーデターを起こすんだ」

トモ「ムリだよ！ オレは逃げる！」

マツ「オレも、逃げる！」

ヨシオ「なんでだよ…なんでお前らいつつもいつつも先に逃げるんだよ！」

トモ「だって、逃げんかったらあいつらにかまるやろう？」

ヨシオ「ずっと逃げつづけるのかよ」

トモ「オレは逃げる。逃げて逃げて逃げるんや。中学でも大人になっても、一生逃げきったるわ」

マツ「来年になってクラス分けになったらこの生活も終わりや。

覚えてないやろ、去年のクラスで何があったか？ せいぜ

い来年までの逃亡生活じゃ。大体、つかまる奴が悪いんや」

ヨシオ「なんだよ、ぼくが悪いっていうのかよ！？」

マツ「そうやん。そもそもなんでヨシオ東京弁やねん。だから

あいつらに目つけられるんや。それがおかしいんや。なん  
でここの言葉でしゃべらんのや」

ヨシオ「べつに、これはぼくの主義だ」

トモ「やっぱり、オレ帰るわ。こんなとこ誰かにみつかったら」  
ヨシオ「こんなことは、なんだ！」

トモを押す。

トモ「なにすんねんっ」

マツ「ちょやめろや」

長門、ゆれる。三人、もみあい。ヨシオが突き  
飛ばしたのをトモがよろめき、マツにつかまり、  
それがヨシオを押し、三人、同時に転がった長門  
を踏み壊す。

ヨシオ「あー！ー！ー！ー！」

トモ「おまえや…おまえが悪いんやからな」

ヨシオ「ひどい…ひどい！ トモもマツも、絶交だ！！ もう二

度とお前らを友だちだなんて思わない！！」

マツ「トモ、にげるぞ」

トモとマツは走っていく。外に出るヨシオ。

ヨシオ「それも逃げてすますのかよ！ それでも友だちかよ！

絶交だ！ ホントに絶交だぞ！」

○野原、ひみつ基地の外、午後夕方

それを、うどん屋の陰からきょうちゃんが見てた。

きょうちゃん、走ってくる。

きょうちゃん「見てたで。ちんぼつや。ちんぼつや(笑)」

壊れた長門を触ろうとするきょうちゃんの頭を殴

るヨシオ。

ヨシオ「さわるな！」

きょうちゃん「いたいよヨシオくん。許してよ」

ヨシオ「…おまえん家のちくわ天、盗んで来いよ」

きょうちゃん「え？」

ヨシオ「売るほどあるんだろ。どうせ売れないんだろ。食わせろ

よ」



きょうちゃん「そしたら、遊んでくれる？」

× × ×

ヨシオときょうちゃん、ちくわ天をむさぼり食う。

きょうちゃん「ヨシオくん、怪獣カード、余ってるって言ってた

やろ。めっちゃだぶってるんでええから一枚ちょうだい」

ヨシオ「なんでもいいのかよ」

きょうちゃん「なんでもいい。怪獣カードやったらなんでもいい

から、一枚もって仲間に入りたい」

ヨシオ「何でもいいゲームじゃないんだ」

きょうちゃん「…」

ヨシオ、でっかいナフタレンを出す。

ヨシオ「このアメ玉食べたらやるよ」

きょうちゃん「それナフタレン」

ヨシオ「このアメ玉食べたら、やるよ」

きょうちゃん、無理して一気に食べる。苦しみな

がら笑う。

ヨシオ「なんで笑うんだよ」

きょうちゃん「ヨシオくんが遊んでくれた」

ヨシオ「なんでなんでも言うこと聞くんだよ。なんで笑うんだよ」

きょうちゃんを殴る。何度も殴る。

きょうちゃん「怪獣カード(手を出す)」

ヨシオ「やるよ！ やるよ！」

嬉しそうに受け取るきょうちゃん。きょうちゃん、

走って逃げる。振り返って、やっぱり笑っている。

うどん屋に入っていく。

ヨシオ「…なんなんだよ。なんなんだよ」

拳を見つめるヨシオ。いけちゃんがやってくる。

いけちゃん「…やりすぎたね」

ヨシオ「あいつらがやることをやってるだけじゃないか。きょう

ちゃんを泣かそうとしてたよぼく。なんなんだよ」

ひみつ基地を壊すヨシオ。壊れていくひみつ基地。

いけちゃん、ゴムまりのように跳ねて壁をぶつこ

わす。巨大な口になって、廃材を食べてしまう。

いけちゃん「うんこー！」

それがそのまま尻から出てくる。

ヨシオ「ふふふ…あはは…あはははははっ。いけちゃんバカじゃないの?」

いけちゃん「あははははは。走ろうよ。楽しくなるよ」

いけちゃん、走り出す。ヨシオ、ついていく。壊れた長門とひみつ基地のまわりを、ふたりはぐるぐる回る。すっかり夕方である。

○ヨシオの家、食卓、夜

食卓の上に、置き手紙。

手紙『今日はパートの日です。冷ぞうこの中にごはんがあります』

ヨシオは一人でごはんをあっためる。

○小さな工場内、夜

弁当を食べている作業服姿の美津子。

友人「美津子、夜のシフトも入れてるの?」

美津子「働かな。誰かにお金貸して、とか絶対言いたくないねん」

友人「ヨシオくん、家で一人なんちゃうの?」

美津子「そうよ。別々に食べることにした」

友人「…」

美津子「なによ。子供は子供で勝手に育つもんや」

友人「ホンマに大丈夫やと思う?」

美津子「…」

友人「朝のシフトにしろた方がええんちゃうかな。今日は私をやっとくさかい、早めに上がり」

美津子「そんなん、悪いわ」

○夜、ヨシオの家、食卓

静かな晩ごはん。美津子は弁当箱から残りを食べている。ヨシオの下手なはし使いを見た美津子。

美津子「ちゃんとおはしを持ちなさい。よくかんで食べなさい」

ヨシオ、はしを持ち直す。

美津子「ホラ、はやく食べなさい！」

ヨシオ「…」

美津子「ちゃんと学校にいつてるの？ ちゃんと座って！ 字は

きれいに書きなさいよ。人柄が出るよ。歯磨きもちゃんと

やるのよ！ アンタの為を思ってるんやからね！」

ヨシオ「…ごちそうさま」

美津子「早くお風呂に入って！ 毎日お風呂には入るのよ！」

ヨシオは風呂場へ。美津子は一人残って落ち込む。

美津子「…」

### ○同、風呂場

風呂につかるヨシオといけちゃん。

ヨシオ「そもそもこれが一番だめなんだー！ー！ー」

いけちゃん「なんでー！ー！ー!?」

洗い場に座るヨシオ。シャンプーで髪を洗う。

ヨシオ「だって一人でシャンプーするだろ。痛くないように目を

閉じてなきゃならないだろ？」

目をつぶるヨシオ。周囲が暗くなる（ヨシオの想像）。

ヨシオ「そのシュンカンに、風呂中が妖怪だらけになるんだよ！

ぜったい！ー！」

緑の巨大なカップ、水色で舌が異常に長い、紫の目の巨大な妖怪が、ヨシオの背中をなめようとしている。

ヨシオ「で、目をあけてもないんだ」

目をあけると元に戻っている。いけちゃん、ヨシオの背中にはりつく。

いけちゃん「じゃいけちゃんが見張ってあげる。背中にぴとってしてあげる」

ヨシオ「ありがとういけちゃん」

○同、二階、ヨシオの部屋

電気の消えた部屋で、布団の中で必死に目をつぶっているヨシオ。

ヨシオ「これもだめー！ー！ぜったい一番だめー！ー！ー」

いけちゃん「だいたい想像つくけどなんでー！ー！ー」

ヨシオ「天井の上をいつも誰かが歩いてるし、フスマの隙間から幽霊がこっち見てるし、かべのシミはかつてに動くし！」

ヨシオの想像。天井がぎしぎしと家鳴りするのにあわせて天井に白い足跡がつく。フスマの隙間の向こうには2メートルの顔がこっちを覗いている。かべのシミはゆっくり動く。

いけちゃん「わかったわかった！ いけちゃんがねむるまで一緒にいてあげるー！」

二人並んで寝る体勢に。寝かかるヨシオ、だが、

ヨシオ「きんきゅうじたい！ きんきゅうじたい！ もっともダメなことが起こりましたあー！」

いけちゃん「なにになになにー！！！」

ヨシオ「夜中おしっこです！！！」

○同、真っ暗なトイレまでの廊下

くらい廊下には、床に人の顔、天井から顔つきのドロリとした液体が下がり、ドアの影には血まみれミイラ、トイレの隙間から手招き、フスマのシミは人型。

ヨシオ「こんな妖怪ろうかを一人でゆくくらいなら、ぼくは名譽のおねしょをえらぶー！ー！ー！！！」

いけちゃん「わかりましたあああついてきまあああすっ！！」  
背中にびとって貼りつくいけちゃん。

○同、トイレ

ヨシオ「あああああああああああ」

ぶるぶるぶるえながら小便するヨシオ。いけちゃん  
んはマフラー状に首にまかれている。

ヨシオ「いけちゃんありがとう」  
いけちゃん「どういたしまして」

○同、ヨシオの部屋

ヨシオ「それからだいすき」  
いけちゃん「うん」

寝息を立てはじめるヨシオ。

いけちゃん「でも、いつまでもいけちゃんはそばにいられないから。そとにでてともだちを見つけて、早くゆっくり大人になってね」

ヨシオの頭をなでるいけちゃん。

○夕、野原

ヨシオと、犬を連れたみき(8)が座っている。

みき「ホラつんできた花きれいやろ」

ヨシオ「きれいだね」

みき「犬、かわいいやろ。ホラ犬」

ヨシオ「かわいいね」

みき「…面白くない？」

ヨシオ「面白いよ。犬かわいいし」

みき「私と遊ぶの、イヤ？」

ヨシオ「いやじゃない。…」

みき「？」

突然、ヨシオは口をとがらせて迫る。

みき「ちょっと何すんの！」

ヨシオ「男と女はキスをするんだ。ぼくは大人になるために、女の子とチュウをしたい」

迫るヨシオ。

みき「キモイ！」

と、思いきりはりたおす。転がるヨシオ。そこへ

みさこさんが帰ってくる。

みさこ「みき、ヨシオくん」

すかさず体勢を立て直すヨシオ。

ヨシオ「みさこさん（つくり笑顔）」

みき「お姉ちゃん、私も帰る」

みき、走って去る。

みさこ「バイバイヨシオくん」

ヨシオ「はい」

手をつないで帰るみきとみさこ。みき、アツカン  
ペー。

ヨシオ「（ぎくり）」

いけちゃん「へー……。男の子じゃなくて、女の子と遊んだ。

ふー……。

真っ赤ないけちゃんが草むらからのぞいていた。

ヨシオ「…なんだよ」

いけちゃん「へー……。もてるじゃーん。大人じゃーん」

いけちゃん、赤い岩になる。目は三角。

ヨシオ「いけちゃんて怒るとまるくなるんだ」

いけちゃん「別にー……。」

ヨシオ「いけちゃんて、女？」

いけちゃん「知らないー……。」

岩状のまま、後ろにごろごろ転がっていく。

ヨシオ「はじめて気づいた。いけちゃんて、女なんだ」

### ○校舎裏

ヤスとたけし、ヨシオを囲んでいる。

ヤス「オレらをクーデターでどうしようって？」

たけし「数で勝てばええって何人集めるつもりやったんや。見た

目より策士やのう」

たけし、一発ヨシオを蹴る。二人、去る。

ヨシオ「トモとマツ、しゃべったのかな。あいつら、裏切ったの

かな…」

と横を見ると、みきが見ている。

みき「なんで…なんで？」

ヨシオ「みきちゃん」

みき「ヨシオくん、いじめられてんの？」

首を振るヨシオ。走って去るみき。

○プラモ屋の前

ディスプレイの戦艦シリーズの中に、長門の完成品がかざってある。1万4800円。ガラスに顔をくっつけて見てるトモとマツ。

トモ「…たっかいなあ」

マツ「オレらの貯金じゃムリや」

そこへみきが。

みき「アンタら！ ヨシオの友だちやな！」

トモ「そやけど…たまに、ヨシオという子？」

みき「そうや。アンタらひどいな。友だちやのに、見てみぬフリしてんのか！」

トモ「それは…」

マツ「なんのことだよ」

みき「漁師の息子らに殴られてんの、何でだまってるんや！」

マツ「オレらは友だちなんかじゃない。あいつとは、絶交した」

みき「絶交」

トモ「ホンマは、オレたちかてて仲直りしたいんや。でもアイツらにやられるんやで。毎日びくびくして暮らすんやで」

みき「…へタレが。へタレ！」

走り去るみき。顔を見合わせるトモとマツ。戦艦長門を見る二人。

○清じいの牛乳屋

清じい「そんな男同士の問題に女が入ってきたらアカンわ。ヨシ

オクんの立場がないわ」

みき「立場の場合ちゃうやん！」

清じい「おまえのおらん所で、もっとやられるようになんで」

みき「……!!」

清じい「まあ、犯罪するほどの頭はあのコンビにはないやろ。小猿が猿山のボス決めとるレベルや。ヨシオとやらは、ワシに空手を教えろ、言いよった。逃げてるだけのアホより見所あるやないか。大きい器にはな、水をためるのに時間がかかるのや」

みき「見所、あるんか？」

清じい「(ニヤリ)ズバリ、ホレとるな」

みき「ちゃ、ちゃうわ！ ヨシオは、みさこが好きなんや。ウ

チの姉ちゃんの方が好きなんや」

清じい「…まあ、飲め(牛乳を出す)」

みき「フルーツ牛乳がいい」

二人でフルーツ牛乳一気のみ。二人、げっぷ。

○夜、ヨシオの部屋

寝るヨシオ。吹き出しのように見ている夢が出てくる。

○夢の中、野原

ヨシオ「死ねっ！ ヤス、たけし！ おまえらなんか、ポッコポ

コだ！」

ヨシオ、二人をぼこぼこにする。空気の抜けた人形のようになるヤス、たけし。しかし別の所から、

ヤス二号「ワハハハヤス二号」

たけし二号「たけし二号」

額に2と書いてある二号組も倒すヨシオ。

ヤス三号「薬物ステロイドヤス！」

たけし三号「サイボーグたけし！」

その二人も倒す。

プロレスラー「オレが挑戦者だ」

ヨシオ「ひっさつ！ 殺人牛乳チョップ!!」

プロレスラーをまっぴたつに。次は象が、戦艦長



門が、UFOがやってくる。

ヨシオ「どうすればいいんだ。どんどん強くなったぼくは、どこまで闘えばいいんだ。どこまで強くなればいいんだ」

ふと後ろを振り向くヨシオ。さっき倒した敵の山。アリやちようちよやトンボがいる。巨大な万華鏡。笑うきょうちゃんが怪獣カードをもっている。笑うと、口からナフタレンがぼろぼろ落ちてくる。

ヨシオ「うわああああ！」

と、いけちゃんが後ろに。地面を指さすいけちゃん。輝くビールの王冠が落ちている。拾うヨシオ。

○朝、ヨシオの部屋

はっと起きるヨシオ。

ヨシオ「？」

右手を開くが何も入っていない。

○ヨシオの家、門柱、朝

左右をうかがうヨシオ。と、みきが待っている。

ヨシオ「なんだよ」

みき「私が一緒にいったる」

ヨシオ「みさこさんは？」

みき「お姉ちゃんは今日はこおへん」

先に歩き出すみき。

○清じいの牛乳屋、朝

乾布摩擦をする清じい。ヨシオとみきが走ってくる。拳を握るマネをする清じい。そのマネをするヨシオ。チョップの素振りをする。突然しゃがむ。

ヨシオ「あーーーーー！ これ！ 超ーーーーレアものの王冠じゃん！ なんでこんな所におちてんの？ 清じい！ 落した？」

夢と同じ王冠。首を振る清じい。走り去るヨシオ。  
ヨシオ「今日は超ラッキーデーだよ！ …どこで見たっけ、これ」  
みき、清じいと目線を交す。うむと清じい。

○野原、放課後

逃げるトモ、マツ。立ちはだかるヤス、たけし。  
石を投げるヤス。よけるヨシオ。電柱の影から見  
守るトモ、マツ。みきを逃がそうとするヨシオ。

みき「イヤヤ！　なんでヨシオ見捨てんの！」

ヨシオ「そういう問題じゃない！」

迫るヤス、たけし。みきを後ろへつきとばすヨシ  
オ。体操服袋を落とすみき。ヨシオ、ヤスに殴りか  
かる。

ヤス「こないだから生意気やのう」

返り打ちにするヤス。舟の櫂で威嚇するたけし。  
右手で手刀をつくり、振り回すヨシオ。全部よけ  
られる。電柱の影のトモとマツにみきが。

みき「なんもせんのか！」

マツ「ムリやろどうみても！」

みき「いくで助けに！」

トモの服をひっぱるみき、抵抗するトモ。

ヨシオの手刀とたけしの櫂が同時にスタート（以  
下は、一瞬の出来事）。みきの落した体操服袋に、  
ヨシオはつんのめる。胸ポケットから王冠が飛び  
出て宙に舞う。

たけし「めっちゃレアや」

王冠に気をとられるたけし。その隙に、ヨシオの  
転びながらの手刀が、たけしの鼻柱に命中。鼻血。

みき、トモ、マツ「うおおおおおおお！！」

ヤス「ヨーシーオー！！」

たけし「こんなんラッキーパンチやないか。ラッキーで物事がく  
つがえるか！！」

ヤスとたけしはヨシオをボコボコに。去ってゆく

二人。集まるみき、トモ、マツ。体操服袋をみきに返して、ヨシオは一人帰る。いけちゃんは空に浮いていて、それを上から見ている。

○夕、家への帰り道

涙を流しながら、下を向いてとぼとぼと歩くヨシオ。足元の影を見ながら。

ヨシオ「影と競争すれば、はやく家につく」

影が勝手に動いて、ヨシオの足と競争する（ヨシオの想像）。

○夕、ヨシオの家、食卓

ヨシオ「いけちゃーんーん」

誰もいない真っ暗な家の中。外へ飛び出るヨシオ。

○夕、ヨシオの家の前

ヨシオ「いけちゃんどこーん出てきてぼくをなぐさめろー」

○夕、野原の先の海

美しい夕日の海。オレンジの世界。ヨシオがたどりとくと、いけちゃんはまた小さくなって、10匹くらいになっている。

ヨシオ「いけちゃんどうしたの!？」

小さいちゃん1「いけちゃんはさびしいと小さくなって、ほって

おくと更にふえるの」

小さいちゃん2「ふえるの」

ヨシオ「…」

小さいちゃん3「ふえるの」

言ったはしから分裂して増えていく小さいちゃん。

ヨシオ「よし、つぶつぶごろごろをしよう」

小いけちゃん1「なにそれ」

小いけちゃん2「なにそれ」

ヨシオ「つぶつぶーごろごろー!!!」

50匹ぐらいの小いけちゃんの上にとびこむヨシオ。

やわらかいいけちゃんをクツション代わりに、上を

ごろごろするヨシオ。テンションの上がるヨシオ、

いけちゃん。

小いけちゃんたち「きゃー!!!」

ヨシオ「ごろごろー!!!」

息が切れるまでごろごろするヨシオ、いけちゃん。

小いけちゃん1「あのね」

小いけちゃん2「いけちゃんのことどう思ってる?」

ヨシオ「だいき」

いけちゃん、ピンクになって照れながら、ひとつになる。

ヨシオ「…いけちゃん、何でここにいたの?」

いけちゃん「いけちゃんには、待ってる人がいるの。なかなか来

ないから、ちょっとさびしくなっちゃって。…でも今日は

ついに一発殴りかえせたね。しかも泣きながらじゃなく、

怒りながら帰ってきた」

ヨシオ「なんでそんなことまで知ってるの?」

いけちゃん「いけちゃんはいつもヨシオを見てるから」

ヨシオ「…でも、ぎゃふんと言わせるなんて全然だよ。むしろ逆」

いけちゃん「あのね。きみはね。よわむしでつよむしで、いじわ

るでやさしいの。それでかっこつけむし」

ヨシオ「いけちゃんは、ぼくのこと知ってるの?」

いけちゃん「すこしね」

ヨシオ「…」

いけちゃん「いけちゃんね、ここで会う約束をした人がいるの。

私が先にきちゃったから、まだずっと先になるまで待つて

るの」

ヨシオ「それって誰?」

いけちゃん「(ほほえむ) まだ言えない」

ヨシオ「いけちゃんは、女で、いけちゃんは誰かを待っている…」

ねえ、いけちゃんは、誰なの？」

いけちゃん「(ほほえむ)それはまたいつか言うよ」

沈む夕日を二人で眺める。おなががグーとなるヨシオ。

ヨシオ「じゃぼく帰るね」

走って帰るヨシオ。気配を感じて振り向くと、いけちゃんが見ている。かくれるいけちゃん。また走り出すヨシオ。振り返る。見ているいけちゃん、かくれる。笑うヨシオ、いけちゃん。

ヨシオ「いけちゃん。ぼく、明日冒険しようと思う。つきあって」  
いけちゃん「いいよ」

○翌朝、ヨシオの家、台所

いけちゃん「コロッケとごはんとしょう油、あとマヨネーズをぶっこんで」  
一気に丼に入れるヨシオ。ぐちゃぐちゃにませる。

ヨシオ「うめえっ」

いけちゃん「でしょっ」

弁当箱につめる。残り半分を皿に入れて、置き手紙とともにテーブルに。網をかぶせて出てゆく。  
美津子、起きてきて手紙を見つける。

手紙『日曜ぐらいいごはんつくらないで、たっぷり寝てください』  
美津子「…」

○ヨシオの家の前

弁当箱を自転車のかごに入れるヨシオ。いけちゃん、かごに入る。

ヨシオ「…」

いけちゃん「なに？」

ヨシオ「いけちゃん、一人で行ってきていいかな。冒険は、一人でいくべきだと思うんだ」

いけちゃん「…いいよ(自転車をおりる)るすばんは任せて」

ヨシオ「ごめん。隣の隣の隣町で、たしかめたいことがあるんだ」

○モニタージュ

国道らしき長い道を、一人自転車を進めるヨシオ。  
赤いスポーツカーに追い抜かれる。金髪のヤンキ  
ー男女がイチャイチャしながら乗っている。

× × ×

海と山に見える道をゆくヨシオの自転車。

× × ×

見晴しのいいところで弁当のぐちゃぐちゃごはん  
を広げるヨシオ。黙々と食べる。

× × ×

山を抜けると、隣の隣の隣町。

× × ×

舟だまりの近くの近くの空地で、体格の大きいのが小さいの  
のをいじめている。

ヨシオ「どこの町にも、ヤスやたけしみたいなのがいる」

その中の大将格と目が合う。その場を去るヨシオ。

○アパートの前

ヨシオ、ブレーキをかけ自転車をおりる。

ヨシオ「…あった」

小さな木造アパートの一階ベランダが見えている。  
ピンクのフラミンゴの大きいおもちゃが野ざらし  
に。道の側溝の前で立ち止まるヨシオ。

ヨシオ「ピンクの鳥の女。隣の隣の隣町。溝」

ピンクのフラミンゴの隣には、戦艦長門の（別の）  
プラモがほこりをかぶっている。溝の中に入るヨ  
シオ。寝っ転がって空をあおぐ。

ヨシオ「お父さんは、こうやって空を見ながら死んだんだ」

洗濯物を取り込む為に若い女（かおり）が出てく  
る。溝の中に隠れるヨシオ。突然排水が流れてき

てずぶぬれに。

ヨシオ「……!! (声を出さないようにがんばる)」  
かおり「誰？」

かおりがひっこむのを見計らって、ヨシオはペランダをのぞき見る。窓から部屋の中を見るヨシオ。貧乏な部屋に、かおりと変なおッサンが住んでいる。長門をつかんで走り去るヨシオ。かおり、思わずペランダまで飛び出てくる。

○ガード下(のような人目につかない所)

長門のプラモを地面に叩きつけて壊すヨシオ。何度も何度も踏む。気がつくとき、悪ガキ達に囲まれている。さきほどのやつらだ。

悪ガキ1「ワレなにもんじゃ。このへんのモンやないな。どっから来た」

ヨシオ「……〇〇町」

悪ガキ2「…ヤスとたけしのおる所じゃ」

悪ガキ1「ヤスとたけしか。ワレ、知っとるか」

ヨシオ「…知ってたら、どうする」

ヨシオの自転車を倒す他の悪ガキ。自転車を壊す。

ヨシオ「何すんだよ！」

悪ガキ1「アイツらには昔ポコポコにされた借りがあるんじゃ」

一発殴られるヨシオ。倒され、囲みで蹴られる。

悪ガキ2「アイツらになめられたままじゃすまんからの」

と、派手なクラクションが。赤いオープンカーに乗った、二流な感じの金髪ヤンキー男女。

男(哲)「コラー……! ガキどもなにやっとなんじゃ!」

クモの子をちらすように逃げる悪ガキ達。車から下りる派手な女、倒れるヨシオに手を貸す。

女「だいじょうぶ? ヨシオくん」

ヨシオ「アレ?…みさこさん?」

だいじょうぶ間違ったかんじのヤンキー女になっているみさこさん。金髪。

ヨシオ「みさこさんじゃない。ニセみさこさんだ」

みさこ「いややわ。私オシヤレになったもんやから分らんのかな。

それより、ズブ濡れやん」

上着の裾でふいてあげようとする。

ヨシオ「…いらない」

みさこ「なんで？」

ヨシオ「香水の匂いがヘンだ。髪の色もパチンコ屋みたいだし」

みさこ「なんでー金色渋い言うてたやん。ホンマの私はこんなか  
んじよ」

哲「どうするん。帰るんか」

みさこ「うん。この子、送ったって。ありがとう」

と、二人はオープンカーに乗る。みさこは助手席、  
ヨシオは後ろに。哲は自転車を持ってきて、その  
隣に積んでくれる。

哲「みさこの隣のボウズやってな。よろしく。オレみさこの  
彼氏やねん」

ヨシオ「…みさこ呼ばわりかよ」

○走るオープンカーの車中

哲の腕に自分の腕を絡めるみさこ。後ろの席で無  
然とするヨシオ。濡れた体でくしゃみする。

○夜、ヨシオの部屋

ヨシオ「うー…」

氷枕で寝込むヨシオ。心配そうないけちゃん。再  
び、吹き出しのように見ている夢が現れる。

○夢の中、ヨシオの通夜

布団の中でおじいさんが寝かされている。ヨシオ  
といけちゃんがやってくる。周りには大人。

ヨシオ「ぼくのお葬式がはじまるんだね」



いけちゃん「なんでわかるの？」

ヨシオ「なんでかな。これはぼくだ。死んだんだね、ぼくは」

○同、葬式

外に出ると、葬式の場面に。

ヨシオ「意外とフツーだなあ。もったかつこ良く死ぬかと思ってたのに。ぼくって結構人気者だったみたい」

周りは老若男女が集まっている。

いけちゃん「さみしい？ でもみんなさみしいよ。こんなもんだ

よ。正直に生きてれば必ずいい事あるなんてうそだしね」

ヨシオ「ぼくが死んでる時に人生の真理をぼやくな」

○同、地上へ上空

二人は宙に浮いている。死んだ魂が上ってゆくように、ずっと上へ上ってゆく。町も山も浜も小さく見える。漁師たちのもで働くヤスとたけし、野原の隣のうどん屋のきょうちゃん、プラモ屋の前のトモとマツ、隣の隣の町の悪ガキ達。ベランダに立つ、ピンクの鳥とかおり。赤いスポーツカーに乗る哲とみさこさん。まるい海の水平線。

ヨシオ「ああ。思い出した」

いけちゃん「なにを？」

ヨシオ「ぼくは、自分でちゃんと決めて生まれて、自分でちゃんと決めて死んでること。何回も何回もそれを楽しんでいるってこと。でもこれは熱にうなされてみてる夢で、目が覚めたらこの大切なことは忘れちゃうんだ」

いけちゃん「わかんないよ。君は本当に死んで、次に目がさめる時はまた生まれるときかも知れない」

○夜、ヨシオの部屋（現実）

目をあけるヨシオ。いけちゃんが透明なゲル状に

なあって（中に氷がたまっている）、額に冷えピタ状態ではりついている。

○深夜、トイレ

おしっこするヨシオ、隣の物音に気づく。

○深夜、ヨシオの家の前

哲の赤いオープンカーが止まっている。哲とみさこさんが荷物を積んでいる。ヨシオ、出てくる。

哲 「おう、今日のボウズ」

ヨシオ 「なにやってんの」

みさこ 「これからこの町を出るんや。哲とどっかで暮らすわ」

哲 「いうたら、かけおちやな」

みさこ 「いやあん、かけおちて」

ヨシオ 「みさこさん、変だよ。一体どうしたの」

みさこ 「私はな、ずっといい子のフリしてきたのよ。本当の自分  
はもっと暴れたいのに、大人しいふりをしてただけ。家に  
いる時は監獄みたいやったわ。私は、やっと翼を手に入れ  
たんや」

ヨシオ 「…」

みさこ 「みつからんように食べ（と紅茶アメを出す）」

ヨシオ 「そんなのいらないっ！」

みさこのアメを払うヨシオ。頭をなでるみさこさん。走り去るオープンカー。頭をぐしゃぐしゃするヨシオ。

○朝のTVニュース

ニュース映像。その赤いオープンカーがぐしゃぐしゃになってクレーンで吊り上げられている。

キャスター 「…見通しのよいカーブでした。なお運転手の○○哲は、無免許で運転していた模様…」

○朝、ヨシオの家、食卓

そのニュースを呆然と見ている寝起きのヨシオ。

○野原

みき「めっちゃかつこ悪いわ。あんなグチャグチャな事故で二人とも無傷って。無傷なのに、みさこ姉は出戻りの傷もん扱いや。いっそ死んでまえば伝説になって、毎年あのカーブでヤンキーがタバコで焼香してくれんのに」

ヨシオ「ぼくはみさこさんの何を知ってたんだろう」

みき「あーあ。私もどっかへ飛んでいきたいわ。この町に居残ってる女は駄目な側の女や。私は、出ていく側になる」

ヨシオ「どこへ行っても苦労するのは同じだよきっと」

みき「なんで？」

ヨシオ「どこの町にもヤスやたけしみたいなのがいるんだ。逃げる限りは同じだと思う」

○雨、野原

相打ちの形で、一発ヤスを殴るヨシオ。一発たけしを殴るヨシオ。やはりボコボコにされるヨシオ。

○清じいの牛乳屋

牛乳を運ぶ手伝いをするヨシオ。清じいは拳を握るマネをするだけ。ヨシオ、やってみる。

○夜、茂幸の部屋（外は雨）

まだ遺品の片付けられていない状態。セロテープで補修された、壊れたままの長門。その前で、ヨシオは自分に絆創膏を貼る。隣にいけちゃん。

ヨシオ「最近さ、コツが分かってきたんだ。殴られそうになった瞬間、前に出て相打ちにするとこっちのパンチも入るんだ。それがこわいけど、実は一番痛くない。めったに成功しないんだけどね」

障子をあげる美津子。

美津子「ヨシオ早くねなさい。私、明日から朝早いシフトにさせてもらたから」

ヨシオ「こないださ、…ピンクの鳥の女の人の所、いつてきたよ」

美津子「え？」

ヨシオ「お父さんの死んだ溝、見てきた」

美津子「なんてことすんの！ …その、女の人には会ったの？」

ヨシオ「のぞいただけで、話はしてないよ」

美津子「…」

ヨシオ「なんか、ガツカリしちゃってさ。この家とはちがう、きらしたくらしがあるのかと思ってたら、案外汚くて、

案外フツで、案外なんでもなかった」

美津子「そんな所…いったらあかんやないの」

壊れた長門を見つめるヨシオ。

ヨシオ「ねえ、お父さんはどうして標準語で話してたの？ どうしてこの言葉でしゃべらなかったの？」

美津子「なんでって…お父さんは学生時代、東京にいったときにこの言葉で話さんようになったって。東京に通用する為にムリしたって。そのムリが直らんようになったって」

黒い枠に入った茂幸の遺影。

ヨシオ「ぼくのこの言葉は、お父さんからもらったんだよ。…ごめんなさい。もうあそこへは行かない。おやすみ」

ヨシオは立って、二階へいこうとする。

ヨシオ「ねえ、お父さんはヘタレだったのかも知れないね」

美津子「そんなことないわよ。お父さんは芯の通った、大人物よ」

ヨシオ「お母さんがそう言うなら、ほんとはそうだよ」

美津子「…」

○同、廊下（外は雨）

階段を上がっていくヨシオを見守るいけちゃん。

廊下に出てくる美津子。

美津子「…(いけちゃんを見つめる)」

いけちゃん「(きよろきよろと周りを見る)」

美津子「いつもヨシオといってくれてるんやね」

のどから心臓が飛び出るいけちゃん。

いけちゃん「!?!?!?!み、見えるの!?!」

美津子「はじめて会えた」

いけちゃん「え…え…っ。お、お世話になってます。えっと…」

美津子「私ね、仕事でいっぱい稼いで、ヨシオにお金残そう思っ

て、あの子ほうりっぱなし。母親らしいことしてへんかも

知れん。私の母もそうやってね、魚屋一人で回して兄貴を

大学まで行かせたって自慢してたわ。…アンタがいて、助

かっています」

いけちゃん「いえ…まさか、姿が見えてるとは」

美津子「(大体の方角しか見ていない)ほんとには見えてないん

です。気配、かな。私のひとりごとかも知れへんよ。たぶ

ん、あなたは神様やないかと思って」

いけちゃん「はあ。そんなでもないですが」

美津子「…あの子との距離の取り方がもうわからへん」

いけちゃん「…大丈夫。ヨシオは大人になります。私た

ちの想像をこえるぐらい速いスピードで」

美津子「ヨシオを神隠しにするのだけは御勘弁を」

あさっての方向に一礼する美津子。去ってゆく。

雨の音。たたずむいけちゃん。その後ろにあずき

洗いが来る(洗うと雨の音)。

あずき洗い「現世のものには、我々は介入できない。我々は変化

しないが、彼らは変化してゆく。そろそろ別れの頃合だぜ」

その隣に、廊下の妖怪たち、頭の中の小人、海に

いた浦島太郎やシャコ貝、競争する影がいる。

いけちゃん「もう少し、彼のそばにいたい」

○野原

空地に放り出される自転車。9人の悪ガキたち。

悪ガキ1「丁度ええ広さやん。ここにしようや」

悪ガキ2「何して遊ぶ？」

あの時の、隣の隣の隣の町の悪ガキたちだ。

悪ガキ3「とりあえず立ちションするわ」

その足下に投げられる石つぶて。ヤスとたけしだ。

ヤス「誰に断わってここで遊んどる」

たけし「オレらのシマじゃ。よそ者は帰れ」

悪ガキ1「関係ないわ。俺らがここで遊ぶ」

ヤス「ああ？」

そこへ犬の散歩で通りかかるみき。尋常ならぬ雰

囲気を察し、脱兎のごとく逃げる。

○きょうちゃんのうどん屋の前

走ってくるヨシオ、いけちゃん。先導するみきは、

ケンカする気まんまんのバットを持っている。

腰をぬかして道にへたりこむきょうちゃん。

トモ「アホ！ お前も逃げろ！」

マツ「つかまったらやばい！！」

トモとマツは逃げてゆく。立ち止まって、野原の

現実を見るヨシオ。

ヨシオ「なんだこりゃ」

ヤスとたけしが、悪ガキ達の足下に屈している。

思わず野原に近づいていくヨシオ。

○野原

悪ガキ1「お前らは存在の価値がない。生きててごめんなさいって  
て言え」

ヤス「もうあかん。もう許して（泣いている）」

ヨシオ「いけちゃん。これは、夢？」

いけちゃん「夢なんかじゃないよ。いたくて、こわい、現実」

たけし「ヨシオ（泣いて助けを求める）」

悪ガキ1「おお？」

悪ガキ2「ニューチャレンジャーか？」

悪ガキたち、ヨシオのところへ歩いてくる。

ヨシオ「いや、これは夢で見たよ。夢で見た。上には上がいて、

上の上には、上の上の上がいるんだ。無限につづくんだよ。

無限につづくんだ」

悪ガキ2「なにブツブツ言うとするんじや（バットで指す）」

悪ガキ3「お前、こないだのガキやな」

悪ガキ2「ホンマや。ヤンキーに邪魔された、プラモのガキや」

悪ガキ1「つづき、しようけ」

ヨシオ「数で勝ったな」

悪ガキ1「ああ？」

ヨシオ「ヤスやたけしがこんなに簡単にやられる筈がないだろ。

ひきょうだ、数で勝ったろ」

悪ガキ1「じゃあそっちも数をそろえろや。それか、タイマンは

るか？」

ヨシオ「え…」

ヨシオ、周りを見る。地面に転がるヤス、たけし。

電柱に隠れるトモ、マツ。バットを構えたままの

みき。腰の抜けたきょうちゃん。敵の9人、ヨシ

オを囲む。

悪ガキ2「今日からここで俺らが遊ぶわ。宅地開発でオレらの空

地がなくなっただんじや。出ていけや（バットで指す）」

ヨシオ「や、野球で決めよう」

悪ガキ3「ハア？」

悪ガキ4「野球？」

ヨシオ「そっちは、9人だろ。勝負は野球で決めよう」

悪ガキ1「なんで野球じゃ」

ヨシオ「下手なのかよ」

悪ガキ2「バカにしとんのか！ 野球でもなんでもやったるわ」

ヨシオ「よし。野球で勝った方が勝ちだ。いいな」

悪ガキ1「ヘタレばっかで集まんのかい」

ヨシオ「ヤスの石投げを知らないな？ 超剛速球でほとんど見え

ないんだぞ。たけしのフルスイングは、人間に当たっても海

まで飛ぶんだ」

ヤス、たけし、起き上がる。

ヨシオ「きょうちゃんラジコンだって、外野フライ完璧に捕れるし、トモとマツの超速い足なら盗塁王だ。…あと、みきちやんもいるし、みさこさんだって出戻って暇だし」

みき「なんでみさこまで」

ヨシオ「暴れたいって言ってたし」

悪ガキ1「(指で数え) 8人やないかい。あと一人は？」

ヨシオ「あと…あと、いけちゃんがいるじゃないか」

隣を見るヨシオ。いけちゃんが、いつの間にかいない。

ヨシオ「あれ? …いけちゃん? いけちゃん」

実はいけちゃんはいる。ヨシオに見えないだけだ。

いけちゃん「いけちゃんはどこにいるよ。いつか見えなくなる日が来るって知ってても、わたしはここにいることを選んでの。いけちゃんは…ここにいるよ」

ヨシオ「……」

悪ガキ2「まあええわ。やろう」

ヨシオ「メンバーそろえるから、明日こい」

悪ガキ3「ハア？」

悪ガキ1「ええやろう。待ったる。明日の終業式終わったら来るぞ。決闘や」

自転車で去っていく悪ガキ達。集まるみんな。

ヤス「どうすんねんヨシオ。野球て」

たけし「いや、意外といい案や。野球やったらみんな出来るし。

ヨシオの采配、けっこういけるかもって思った」

トモ「逃げようよ」

みき「アイツらに顔覚えられたで。あの人数、逃げ切れへん」

マツ「トモ(肘でつつく)」

トモ、ポケットからプラモのパーツを出す。

ヨシオ「…長門の、艦橋」

トモ「ごめん。こんだけしか買えんかった」

マツ「絶交、やめよう。野球でなんとかしよう」

きょうちゃん「ぼく、何したらええ？」



ヨシオ「この野原を守ることは、ぼくたちを守ることだと思う。  
たたかうんだ」

たけし「アイツら、みんなでぎゃふんと言わせてやる」  
ヨシオ「……！」

いけちゃんはヨシオを後ろから見ている。

いけちゃん「自転車に乗るためには、最初誰かにうしろをもたれて走るじゃない？ でもいつかうしろの手を離さないと、自転車にのれるようにはならないんだよね。人生という自転車に、いまきみはのりはじめた」

みんなと作戦会議をするヨシオ。みきがみさこさんを連れてきた。

○海辺、夜

ヨシオ、パンクした自転車でやってくる。

ヨシオ「いけちゃん！ どこだよ！ どこいったんだよ！  
ぜったい勝たなきゃいけなくなっただ。いけちゃん」

自転車で美津子を探しに来る。

美津子「ヨシオー！ 今何時やと思ってるの！！ こん棒ぶん殴りの刑にするよ！！」

自転車を降りて、少し押して示すヨシオ。

ヨシオ「ごめんなさい。パンクしたんだ。先に帰って」

美津子も自転車を降りて、一緒に夜道を歩く。

美津子「……」

ヨシオ「…（海を見ている）」

美津子「何を隠してんの？ また隠してるんでしょ」

ヨシオ「隠してないよ」

美津子「こんな時間まで何してたの。どこへいったの！？」

ヨシオ「いちいち干渉しないでよ！ 母さんの出る幕じゃないんだ！ 子供には子供のことがあるんだ！！」

ガタガタいう自転車に乗って先に行く。

美津子「漁師の子供の事？！ お父さんの事？！ なんでもお前は一人で解決しようとしてる！ アンタは、アンタは、…  
一人やないのよ！」

止まるヨシオ。

ヨシオ「…いつか、いつか話すよ！」

ガタガタいう自転車で走り出す。

○翌日、野原

太陽。青い空。自転車で現れる悪ガキ9人。ヤス、たけし、トモ、マツ、きょうちゃん、みき、みさこさん、ヨシオ。空からいけちゃんが見守る。

ヨシオ「たたかいを、はじめるぞ」

戦場は草ぼうぼうの野原だ。ベースは空き缶、ボールはゴム球。でもにぎりしめた思いは本物だ。プレイボール。地面にかかれたスコアボードは、『わしらvsオレら』。

ヤスの剛速球をヨシオが受ける。敵のバッター空ぶり三振。ヤス、いつも石をもて遊ぶように、ボールをもつ。

ヨシオ「やっぱヤスはすげえ」

相手、打ち上げる。

ヨシオ「きょうちゃん！」

ライトのきょうちゃん、びくつとする。

ヨシオ「左右左左、うしろうしろうしろ、前！ 3歩あるいて2

歩下がる！ 目つぶって、バンザイ！」

その通りに動くきょうちゃん。バンザイしたグラブにボールがおさまる。びっくりするきょうちゃん。おおおと感心するみんな。

× × × ×  
フラッシュ。昨日の会議。ヨシオがみんなのポジションを言い当てる場面。

たけし「いつの間、そんなこと考えてたんや」

ヨシオ達の攻撃。トモ、マツ、セーフティバントで出塁、同時盗塁。困惑する相手。

ヨシオ「逃げないトモとマツの足、見てみる！」

三番、みきちゃん。びびる。

みさこ「びびっとらんとバット出さんかー！ー！！」

ヨシオ「みさこさんキャラ変わった」

へっぽこバントを当てて三塁方向へ走り出すみきちゃん。

全員「ちがーう！」

たけし「ワンナウト二三塁。4番、オレ」

舟の櫂をぶんぶん振り回し、構える。フルスイング、ホームラン。うおーと喜ぶみんな。

みさこ「よう飛ぶなあ。海の向こうまでいくかなあ」

× × ×

いけちゃんは、見えないながらも協力。ベースコイチでランナーが進むべきかどうか指示したり、フライを空中でフーフー吹いてファールにしたり、猫じゃらしでバッターの鼻をくすぐったり。

× × ×

悪ガキ2「あいつら、そこそこやりよるな」

悪ガキ1「もうええわ。やってまえ」

ピッチャーはきょうちゃんの顔面にボールをぶつける。

ヨシオ「きょうちゃん！」

ヤス「わざとや！」

殴りに行こうとするたけしをヨシオが止める。

ヨシオ「たけしが殴って一人倒しても、あとみんなはやられる。

ケンカじゃぼくらの負けだ」

みさこ「せや。こっちのやり方で勝たな」

つくり笑いで一塁に向かうきょうちゃん。

たけし「次は？」

ヨシオ「…ぼく」

打席に立つヨシオ。初球、顔面に当る。

ヤス「あからさまやろ！」

ヨシオ「いや、当ってないよ。気のせいだよ」

ヤス「めっちゃ顔面いったやんけ！」

ヨシオ「ヤスの投げる石よりぜんぜんやわいぞ。こんなの、あた

ったうちに入らない」

次の球も顔に飛んできた。

ヤス「ヨシオ、また顔！」

ヨシオ「殴られて痛くないコツは、相打ちを狙うこと、かな」

ヨシオ、ボールに空手チョップ。打ち返された球

は、見事にピッチャーの顔面直撃。鼻血ブー。

ヨシオ「自分の手を見て）…当たった。必殺技だ」

敵ピッチャー「おまえ…!!」

殴りかかるピッチャー。飛び出すヤス、たけし。

ヤスは石を拾って投げる。悪ガキたちも応戦、乱闘に。

みさこ「オラーーーー!!」

とイスを投げるみさこさん。大股開きでパンツが見える。みき、きょうちゃん、呆然。そこへ、自転車で配達中の清じいが通りかかる。

清じい「コラーーーー!! お前ら何やっとなんじゃあああ!!」  
たけしの後頭部にとび蹴り。悪ガキ1に真空飛び  
膝蹴り。もみくちゃな乱闘。更に駐在さんが来て、  
漁師達も騒ぎを見つけ、乱入。

× × ×

パトカーのくるくる回る赤いサイレン。こっぴどく叱られている子供たち。野次馬。近所のおぼさに連れられて走ってきた美津子。ヤス、たけし、ヨシオが一緒にいることにびっくりする。

美津子「！（野次馬をかきわける）」

しゅんとなった悪ガキ達は自転車で帰ろうとする。

ヨシオ「ねえ」

悪ガキ1「？」

ヨシオ「遊ぶところがないんだったら、明日また野球しにきてよ」  
悪ガキ1「なんて？」

ヨシオ「(破顔一笑) つづき、やろうよ」

驚く悪ガキ達、ヤス、たけし、みんな。ヤス、たけし、ヨシオの肩をたたく。笑うヨシオ。

美津子「お父さん。ヨシオ、だいじょうぶみたい」

そのヨシオを見ている美津子。

○翌朝、ヨシオの家、門柱

いけちゃんが待っている。

ヨシオ「野球に行ってきます！」

いけちゃんに気づかず、まっすぐ出てゆくヨシオ。

いけちゃん「きみは、いつの間にか足が速くなってるね。一緒に走ってると思ったら、きみはどんどん先へいく」

○大きなしゃらの木の前にいけちゃん

いけちゃん「あのね。海の間こうで何百年も長生きしたしゃらの木に花がさいたよ」

○海でイワシの子の群れの中にいるいけちゃん

いけちゃん「ふもとの海には、イワシの子供がたくさんやってきてね」

○浜辺の大量のクラゲにびっくりのいけちゃん

いけちゃん「岸にクラゲがあがってた」

○野原への道

走ってゆくヨシオ。

いけちゃん「あなたのうしろ姿がすきな。おしえてあげなギヤ  
と  
思  
っ  
て  
ね。だ  
っ  
て、男の子って好きでしょう」

○野原

野球に興じるみんな。フライが高く高くあがる。

いけちゃん「ねえ。夏が来たよ」

空をあおぐいけちゃん。見事な入道雲が空一杯に。

○きょうちゃんのうどん屋、夏の終わりの昼下がり

はり紙『8／30をもって閉店します。ごひいきでございました』

○野原、夏の終わりの昼下がり

思い思いの姿勢で、高くなった空を見つめる15  
人の子供達（きょうちゃん、みさこがない）。

秋を告げるトンボが大量に舞い、蝉はツクツクホ  
ーシにかわっている。うどん屋のはり紙を見るト  
モ。

トモ「きょうちゃんのうどん屋、つぶれて夜逃げするんやった  
ら、みんなでいっとくんやったなあ」

みき「アホか。子供の罰ゲームに使われるぐらいますいんやで。  
基本がなつとらんのじゃ。そらつぶれるわ」

マツ「アイツ、いっつも笑ってただけやったのに。もっと話し  
ておくんやった」

みんな「…」  
ヨシオ「(みきに) みさこさんの行方、分かった？」

みき「さあ。別の男とかけおち、としか分らん。連絡待ちや。  
どこまで飛んでいったんやら」

トンボを見ながら。  
ヤス「結局、20勝19敗1分けか」

悪ガキ1「その引き分けは最初のやつやないか。ノーカンにしよ  
うや」

たけし「途中からトレードとかしたし、どっちの勝ちとか分らん  
なってるやん」

ヨシオ「どっちの勝ちとか、もう関係ないよ。あーあ、今日で夏  
休みも終わりかあ」

みんな「…」  
ヤス「ヨシオさ、最初いきなり野球で勝負や、言うてびっくり  
したわ。殺される思ってたのに、お前だけがここを守ろうと

言い出した」

たけし「それに、みんなの得意なことを見抜いてた。そんな発想俺らにはなかったで」

ヨシオ「なんとなく、全部を見てたらそう思ったんだ。空から全部を見るように」

ヤス「全部を見るのか。オレの親父も漁のときは波も雲も鳥も全部見る言うてるわ。すごいなお前。ぎゃふんやな」

ヨシオ「いま、ぎゃふんて言った？」

ヤス「？」

たけし「言うたよヤス」

ヨシオ「アハハハハハ。ホントにぎゃふんと言う人はじめて見たよ。アハハハハハハハハハ」

悪ガキ1「ほんまや」

悪ガキ達、帰り支度。

悪ガキ2「じゃ俺ら、いくわ。おもしろい夏やったで」

ヨシオ「また、こいや」

ヤス「ヨシオ、いつから東京弁やめたん？」

ヨシオ「え、ぼく使ってないよ」

たけし「また戻った。一瞬やったな(笑)」

自転車で去る悪ガキ達。

ヤス「じゃ明日」

ヨシオ「…じゃ」

みんな、ちりぢりの方向へ。

たけし「学校で」

ヨシオ「…学校で」

○夕方、海

いけちゃんが待っている。ヨシオ、走り出す。

ヨシオ「いけちゃん！ ひさしぶり！ どこ行ってたんだよ！

もういなくなったのかと思ってたよ！！」

いけちゃん「やっとまた会えたね。よかった。次いつ会えるか分

らないからさ」

ヨシオ「ちょっと待って。野ぐそするから」

すぐ終了。

いけちゃん「野ぐそも早くなったねー」

歩き出す二人。

ヨシオ「今日は一緒に寝ようよ！ 話したいこといっぱいある

よー！」

いけちゃん「うん」

○ヨシオの家、食卓、夜

ヨシオ「おかわりっ！」

と茶碗を出すヨシオ。三杯の茶碗に三杯ごはんを

よそう美津子。

いけちゃん「食べすぎだよ」

美津子「ほんまよう食べるようになったわ。また、ようけ働かな」

微笑む美津子とヨシオを交互に見るいけちゃん。

○ヨシオの家、風呂内

目つぶってシャンプーしながら話すヨシオ。

ヨシオ「それでね！ ヤスとたけしの奴ったらさ、ちよーびび

ってやんの！ でもぼくだって足がガクガク震えてさ！」

楽しそうに聞いているいけちゃん。

○ヨシオの部屋、夜

ヨシオ「それでね…それでね…」

ふとんの中で眠りに落ちるヨシオ。団扇であおい

であげているいけちゃん。

いけちゃん「夏を過ぎた男の子は、ひなたのにおいがする。きみの顔、ひたいが広くなったね。いろんなことを考えるから。

目がいつも光るようになったね。とおくのほうまでよく見るから。くちびるがへの字になったよね。たくさんだまつ

たから」

頭をなでるいけちゃん。



ヨシオ「(寝言)ほんとにぎゃふんて言うんだ」

いけちゃん「(笑)もう、男の子の時間が終わっちゃったんだよ。  
ここからは一人で行ってね」

いけちゃん、ヨシオを抱きしめる。

○朝、台所

いけちゃんの言う通りに料理をつくるヨシオ。

いけちゃん「玉子をといて、ちりめんじゃことおネギを入れるの。

あと、おしょうゆを少し」

○朝、食卓

その玉子じゃこごはんを食べるヨシオ。

ヨシオ「うめえっ」

いけちゃん「でしょっ。おぼえててね。これは、いけちゃんのだ

いじょうぶの味なの。これがあるとね、おかずがなーんも

ない日も、ひとりぼっちのごはんも大丈夫なの」

ヨシオ「…(口をもぐもぐさせている)」

いけちゃん「(くしゃくしゃの笑顔で)さよなら」

突然、いけちゃんは消える。

ヨシオ「いけちゃん?」

○ヨシオの家の外

走って出てくるヨシオ。外で待っているいけちゃん。

ヨシオ「いけちゃん!」

いけちゃん「さいごに、言っておくね」

ヨシオ「なに?」

いけちゃん「私が、誰なのか」

いけちゃん、ヨシオをのせて空をとぶ。

○海の見える野原

海辺で手をつなぐ老人と老婆（二人とも顔は見せない）。それを空から見るヨシオ、いけちゃん。

ヨシオ「あれ？ ぼくだ。夢で見た、未来のぼくだ」

野原に下り立つ二人。遠くの老人ヨシオと老婆。

いけちゃん「わたし、あなたの最後の恋人だったの」

しわくちやの二人の手が離れる。と、老人ヨシオが墓に変わっている。ショックでひざまづく老婆（いけこ）。

いけちゃん「わたしたち、とても短い恋をしたの」

墓のそばに花を供えるいけこ。

いけちゃん「ただ、あんまりにも短い恋だったから、神さまにお

願いしてもう一度あなたに会いにきたの」

#### ○昔のヨシオの家の前

家から出てくる新婚の頃の茂幸と美津子。美津子に抱かれた赤ん坊。その前に、空から小さいいけちゃんが落ちてくる。赤ん坊は気づくが、美津子と茂幸は気づかない。赤ん坊を見る小さいいけちゃん。

#### ○元の野原

墓は消えて、現在の野原に。

ヨシオ「いけちゃんは、未来から来たの？ だから何もかも知ってたの？」

いけちゃん「大人のあなたからいろいろ聞いてたから、この目で一度見てみたかったんだ。ありがとう。わたし、あなたの子供のころを見られて、しあわせだった」

涙がぼろぼろ出てくるいけちゃん。体が浮いて、ゆっくり透けていく。

いけちゃん「その時間おしまい。きみは、大人になる」

ヨシオ「いけちゃん。ちょっと待ってよいけちゃん！」

いけちゃん「ときどきはまだ会えるかも知れないよ。でも、わたしの声も届かなくなる日がくる。そしたら、どこかで私が

生まれた合図だよ。いつか、わたしをみつめてね。待ってるから」

ヨシオ「いけちゃんはずっと待ってた人って……ぼく」

いけちゃん「わたし、あなたを待ってるのならとくいなの」

涙を流すいけちゃん。空に消えていく。

ヨシオ「いけちゃん！ いけちゃん！」

走り出すヨシオ。糸が切れた凧のように空に上っていきいけちゃん。号泣しながらバイバイしている。消えるいけちゃん。

ヨシオ「…いけちゃん」

野原にひとりになったヨシオ。暗転。

ヨシオ（18）NA『それから』

○ヨシオの部屋、深夜

ヨシオNA『あ、今いけちゃんがかっこを見ているな、とか』

受験勉強をするヨシオ（18）。うしろの廊下からいけちゃんのぞく。振り向くが、また机にむかうヨシオ。

○3月の駅のホーム

ヨシオ「…父さんの見た東京を見てくるよ」

美津子「ガツンとかましてこい」

ヨシオ、美津子を抱きしめる。泣いている美津子。

○電車の中

ヨシオNA『通りすぎたかな、って思う時があったけど…』

窓の外にいけちゃんが飛んでいる。それには気づかず、窓際の空の牛乳ビンをとるヨシオ。手刀をつくって、コンコンと叩く。

○春の東京、一人ぐらしの部屋

引越したばかりで段ボールの山。テーブルには、できたばかりの玉子じゃごほん。手紙があるのに気づくヨシオ。ひらく（中身はまだ見せない）。言葉を失うヨシオ。

○大学の教室内

空いた席に座るヨシオ。隣に、昔のみさこさんによく似た女の子（ミサエ）が座っている。会釈してびっくりするヨシオ。

ミサエ「なんですか？」

ヨシオ「いや、初恋の人にすごく似てたから。その人は今でも行方不明で」

ミサエ「いつの時代のマニュアルよそれ」

ヨシオ「いや、本当なんです。オレ、ヨシオ。名前教えて下さい」  
ヨシオNA『18才の時大学に入って、最初の授業で隣に座った、

みさこさんによく似た女の子にはじめての恋をして』

いけちゃんはそれを見ていた。あとずさりして、後ろ手で教室のドアをあけて、笑うヨシオと彼女をみながら、そっとドアを閉める。

ヨシオNA『ついにいけちゃんが見えなくなった』

○一人ぐらしの部屋

テーブルの上の手紙。それはりんぷんノートの切れ端。あの時の王冠がゼロテープで止まっていて、9才のヨシオの字でかいてある。

手紙『未来のボクは、世界を変えた？』

窓があいていて、カーテンが風に生き物のように揺れている。窓の外からいけちゃんが笑顔でぞいている。ひっこんでいなくなる。窓の外には、青い空が広がっている。

おわり